龍族
नागा लोक
第７号
南天会
平成 28 年
8 月 30 日

佐々井秀嶺上人来日特集

御礼

佐々井秀嶺上人
メッセージ

今般も約一ヶ月と七日間に亘って、日本全国を皆様方の御厚意により御招待を頂きました。各宗の皆様、又は若い青年の皆々様、そして五、六人の御随身の方々に守られて、無事に各地を御訪問させて頂きました。

少々体調も悪く、その為に思う様に皆さまへの対応も出来ず、色々と行く先で中途半端な状態で終わった事を誠に申し訳なく思っております。兎にも角にも皆様方の御厚情によって無事帰国の途を迎えましたことは、諸仏諸天の御慈悲のおかげと併せて感謝致しております。

ナグプールに帰りました暁には、私は連日連夜の真剣勝負をインド大地に展開して行かねば成らない大きな使命を双肩に担って、その自覚と信念に基づいて行動をしなければ成らんと固く心で決意しているものであります。

南天鉄塔の発掘については大体目星はつきましたけれども、その鉄塔の中身はまだ不明でありますので、またインド考古省の許可を取り、日本考古学の非常な足跡を残しております先生方にインドに来て頂きまして、中身調査に今後は邁進して行かねば成らぬ事を決意致しておる次第であります。

例えば回教徒のメッカ、或いはキリスト教のイスラエル、或いはシク教のゴールデンテンプル、ジャイナ教等それぞれ世界の各宗教の総本山は、その崇拝する信仰者の手によって運営展開されておりますが、ただ惜しむらくはひとつ、この全世界仏教徒の総本山であり根本道場であるインドビハール州に位置するブッダガヤ釈尊成道の地である大菩提寺が、これまで四百年、五百年、あるいは一千年に亘って仏教徒の手に管理権が無く、他宗教徒の手に管理権が握られているという事は、全世界の仏教徒また日本仏教徒にとっても痛恨の極みであり、非常に不名誉であり不本懐であることを痛感しておるものであります。

依って過去十八年間に亘って闘争に闘争を重ねてきた私としては、断じてこの世界仏教徒の手に成さねば成らぬ大使命があり、それを成さざれば仏教徒としての自覚と信念は皆無となるのであります。

幸いインド大統領の使命において、インド最高裁判にかけて事の明白を明確にする覚悟であります。

ブッダガヤの解放運動は明治の頃よりスリランカのアナガリカ・ダンマパーラ師によって成されましたが、その時にも日本の各宗派には多大な支援をして頂いている歴史があります。不幸にしてダンマパーラ師が解放未完遂のまま急逝されてのち百年目、この私が大使命を双肩に担って現在まで全インド仏教徒を率い、或いは全世界の仏教徒に呼びかけ、日本仏教徒の御同情、御同感を頂いて、これを完遂せしめる覚悟であります。

そういう使命を持っておりますので、インド帰国早々に多忙となり、全インドを自動車にて昼となく夜となく行動していることは、私の宿業であり運命であると思っております。

年老いて八十一歳の足腰不自由な私も、途中で倒れるやもしれないと、いささか自分の前途に危惧を抱いておるものですが、これも皆様方の御慈悲また御同情のご祈念によって、やり遂げることが可能ではないかと、私自身諸仏諸菩薩に日夜お祈りしておる次第であります。

本当に有難う御座いました。どうか日本の皆さま方も御壮健でありますよう、遠く天竺の彼方よりお祈り申し上げて止みません。御法縁がありましたら又お目通りすることも可能でありましょうが、私も一度死んで生き返ったような人間で、そう満足な体では無い様に思いますので、どうか皆さま方の御祈念よろしく御慈悲を賜りたくと念願して、私の挨拶と龍族７号の巻頭一言と致させて頂くものであります。有難う御座いました。

南天龍宮城沙門　天日秀嶺　合唱九拝
（七月六日夜　帰印前日の東京にて）

二〇一六年 佐々井上人日本滞在道中記

佐伯隆快

インドの6月の酷暑期を避け、静養目的の一時帰国として準備していましたが、「日本でやることがあるならば帰ります。私に役目を与えてください。」とのバンテジーの言葉に、各方面の方々に相談したところ、徐々に講演依頼などの問い合わせがあり、成田到着の6月2日にはほぼ全日程が埋まるということになってしまいました。静養どころではない過密日程に体調等心配しましたが、一日一日と確実に役目を遂行するごとに気力みなぎる佐々井上人。まさしく怒涛の一ヶ月が始まりました。

6月2日　帰国

お弟子の宮本龍勝師が5月末にナグプール入りして同行され、順調なる旅程で成田空港に到着。大勢の支援者関係者の出迎えを受け、笑顔の帰国となりました。そのまま通年のごとく成田山へ参拝。橋本照稔貫主様に面会し、鶴見照碩猊下の墓参をされました。

6月3日　高尾山参拝

東京滞在中は、昨年同様南天会賛同人の織田隆深師のお寺真成院に宿泊。今回の随身は1月に滞在支援隊でナグプールに行った姫野君が、元気よく付き従いました。高尾山では師僧山本秀順猊下の墓前にて読経。大山隆玄貫主様に面会して、楽しく会談されました。

6月4日　埼玉訪問

宮本龍勝師の自坊、埼玉無量寿院訪問。宮本慶通ご住職に昨年工事中だった次世代型公園墓地「月の森」を案内いただきました。その後、昨年2月にナグプール訪問旅行を企画された鴻巣仏教会を表敬訪問。東光寺ご住職川上秀忍師の奥様は、全インド比丘総本山建設時代の支援者、高麗行雄僧正の娘さんで、高麗僧正の遺影を前に本堂で読経しました。ガンジス河もかくやと見まがう利根川の河岸段丘に臨む常勝寺では、文屋仏教会長の冗談を交えた温かいご挨拶に、バンテジーも龍樹菩薩ご応現の話を力強く話されました。

6月5日　南天会交流会

四谷真成院の月例会に参加され、織田

ご住職、真成院の方々の協力に、感謝のお礼を述べられました。密門会の皆さんから集められた支援金50万円が南天会に寄贈され、今回日本滞在の諸費用に使わせていただきました。

そして午後2時から、南天会支援者関係者が集い、仏旗を背に坐す佐々井上人を囲んで交流会が行われました。夜には南天会会員の富樫さん経営の雑炊屋さん「野武士」にて世話人有志の歓迎会に参加。ちょうど四谷の須賀神社の大祭で、お店のある杉大門通りで阿波踊りや神輿行列に遭遇。手を叩いての祭り見物となりました。歓迎会では南天会会員でもある柳家燕弥師匠による即席高座も披露されました。

6月6日　靖国神社

昨年夏に食欲不振から体調が悪化した際に、単身ナグプールに入りお世話をされた小林健二氏の案内で、九段の靖国神社を参拝。佐々井上人の母方の伯父さんが二人戦死されていて、ご英霊に供養され平和を祈念しました。

6月7日　岡山へ

新幹線にて故郷岡山へ到着。長年の支援者長泉寺宮本光研師を訪ね、ナグプールから運ばれた必生火天不動尊の石像に参拝。いよいよ元気な様子です。

6月8日　黒住教　姫路

岡山市議会議員の浦上氏のご案内により、黒住教本部神道山に参拝。山上の日拝所にお参りし、副教主の黒住宗道氏と「世界平和について」というテーマで対談されました。午後から姫路へ。佐々井上人最大の支援者、有方静恵さん（昨年逝去）のお墓詣りをされました。途中人生初の回転ずしでは、よく食べる随身姫野君を頼もしそうに(?)見るバンテジー。帰りには白新の姫路城を遠望しました。

6月9日　曹源寺　滴水会館

円山の臨済宗曹源寺で原田正道師と面談し、松尾一道師範の空手道場滴水会館を訪問しました。また奉還町の古書店一刻堂を訪れ、集まったお客さんを前に苦悩の青年時代の話を熱弁されました。

6月10日　万歩書店

「一日万歩書店の日を入れてください。」とのことで、この日は開架50万冊を誇る岡山の大古書店、万歩書店来店。ところが長旅の疲れか、並び立つ背表紙の密林に眩暈を起こし、早々に切り上げて吉備路ドライブ。8日に上がった神道山を越えて、吉備の中山を下り吉備津神社へ。車窓から比翼入母屋造りの国宝社殿を拝し、犬養木堂公の銅像を見上げる。つづいて鼻ぐり塚で有名な福田海を通り、吉備津彦神社へ。水攻めの古戦場備中高松城址を車で通過し、最上稲荷に参籠。備中国分寺の五重塔を遥拝して倉敷一心念誦堂入り。

6月11日　倉敷慈命会

毎回この日は、私（佐伯隆快）の主催する脱原発行動「慈命会」に参加いただいております。倉敷駅頭でスピーチの後、中央通りを行進し「原発を止めよう」「いのちを守ろう」の掛け声を上げます。今年は美観地区で「脱原発句会」を開催しました。

原発のくかいのなかによむくかいかな　ささいしゅうれい

句会終了後、黄昏時の高梁川沿いを遡上して故郷新見へ向かいました。

6月12日　佐々井家土井家墓参

6月13日　新見共生高校講演

新見滞在は同郷の支援者、遠山睦子さ

んが中心となってお世話されました。地元の高校生を前に、体育館に響き渡る声で1時間20分お話されました。「インド仏教に捧げた人生」という演題ながら、家出をしては自殺未遂を繰り返す煩悶青年の話が続き、インド到着というところで時間オーバー。しかし、その姿、迫力は間違いなく伝わったと思います。「私にはまだやらなくてはならないことがあるのでこれから頑張ります。君たちも人のため社会のためにやるべきことを見つけて頑張ってください！」

6月14・15日　新見滞在

生家のある別所地区、平家岳源氏柵、神郷町などを訪問。旧知の人々に会いとても充実した故郷滞在となったようです。

6月16日　尾道浄土寺講演

雨の中千光寺に参拝。尾道水道を望み、ロープウェーに乗車。大本山浄土寺にて尾道真生会主催の講演会に登壇されました。

6月17日　広島

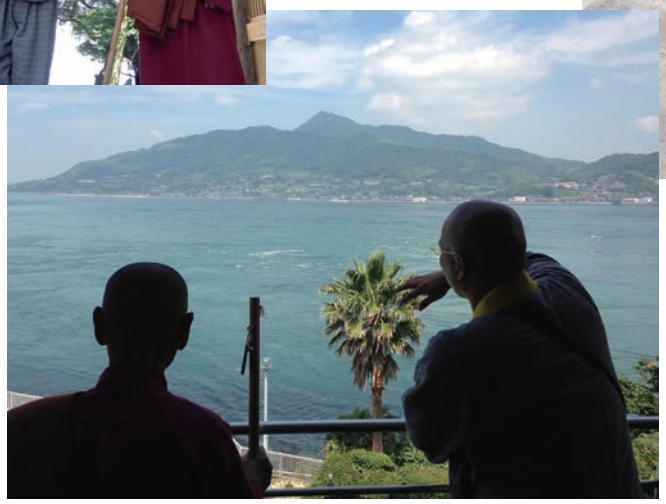
実に6回目となる八千代町の佐々井厳島神社に参拝。そのまま歴史街道国道54号線を南下して一昨年の土砂災害被災地を経過し安田女子大学へ。マンセル遺跡発掘の協力を要請している山田俊亮助教の研究室を訪問しました。発掘プロジェクト関係者の中村龍海さん、飯田寿一さんも合流。ボーリング調査の概要について説明を聞きました。その後、広島の平和記念公園を訪れ、原爆資料館を見学。海沿いの国道2号線から宮島を遥拝し、岩国へ向かいました。

6月18日　山口

岩国吉香公園のシロヘビ資料館を見学し、平生町の般若寺へ。今回の日程で「役目を与えろ」というバンテジーの指示により、私が一番最初に思いついたのが「龍宮西門」参拝という企画でした。

般若寺は般若姫伝説の残る古刹で、寺から望む大畠の瀬戸で金龍の怒りを鎮めるために身を投げた般若姫を弔うために建てられたと言います。観音堂が建つ山上は般若姫の古墳とみられ、山門は瀬戸内海の満ち潮引き潮によって阿吽の呼吸をしているなどと、福嶋住職の説明を聞きに前もってリサーチにも行っていました。福嶋弘昭住職、中村明珍師の案内で先ず周防大島の大多満根神社を参拝。大畠の瀬戸を大河の流れのように渦巻く潮流を見ました。その流れの中ほどに、「龍宮」と呼ばれる深さ82メートルの海孔があるそうです。

次に案内されたのが田布施町から登っていく岩城山。この山は異様な空気が漂っていました。麓の神道天行居という



宗教本部横の石柱を通り、鬱蒼と茂る森を抜けて山上への道を登っていきます。総勢７名を乗せた福嶋師の車もエンジンに異音を生じ、バンテジーもしきりに気にしていました。岩城山は６６３年白村江の戦いに敗れた日本百済連合軍が、唐新羅連合軍の襲来に備えて築城した古代山城で、中腹には神籠石と呼ばれる大規模な石塁が残っています。幕末この地で尊王に燃えた志士たちが蜂起して第二奇兵隊が結成され、かつて山上にあった真言寺院神護寺を廃し、諸人の入山を禁止し練兵場としました。福嶋師はこれを神仏分離の端緒とし、再び神仏が親しむようにと、山上に残る岩城神社の宮司さんの快諾を得た上で神護寺本尊の千手観音石像を発願建立しました。それを聞いたバンテジーは「よくやってくれた！」と福嶋師に握手を求め、千手観音石像に読経しました。ふと同行の小林三旅さんが、神護寺跡地の一画に立つ石碑に目を向けていました。

周東健児　起って血盟す
回天の偉業　雲を破って成る
千古の秘謎　尚解く可し
誰か遺烈を承けて　聖明に答えん

それは、同地出身の政治家〝昭和の怪物〟こと岸信介が昭和19年10月、岩城山に登山して詠んだ「第二奇兵隊士碑」という石碑でした。日本が戦争の奈落へ突入せんとする終戦前年、第二奇兵隊に倣ってこの難局を打開する烈士の登場を祈ったものでしょうか？それにしても「千古の秘謎　尚解く可し」とはどういうことか？三旅さんは首をひねって考えています。はて、第二奇兵隊といえばその中心人物立石孫一郎が討幕の先駆けを期して倉敷代官所を急襲した「倉敷浅尾騒動」の当事者で、これを鎮圧したのが倉敷代官佐々井半十郎だったか…。このあたりからバンテジーの歴史探究ミステリーが始まってまいります。夜、岡山帰着。

6月19日　京都

今回帰国のメインイベント、「佐々井秀嶺師来日特別講演　我が龍樹の地・マンセル」が京都産業大学むすびわざ館で開催されました。懸案のマンセル遺跡再調査プロジェクトのキックオフイベントであり、南天鉄塔ファン（？）には這ってでも行きたい講演です。昨年の高野山講演第１部の「私観南天鉄塔」を受け継ぐ内容で、マンセル遺跡の重要性、龍樹菩薩の顕彰という大テーマを世に問う興味深い発表が行われました。バンテジーの基調講演に続き、南天会会員の志賀浄邦京産大助教、中村龍海氏、そして発掘プロジェクト発願者、建築家の飯田寿一氏が登壇しました。はたしてマンセル遺跡再調査の顛末や如何に？開け！鉄塔。

6月20日　京都

志賀さんご家族の案内で、大原寂光院、一乗寺下がり松、八大神社を参拝。宮本武蔵銅像前で、佐々井小次郎逆手握りの構え。

6月21日　大鹿村

新幹線で名古屋へ。第二次滞在支援隊の手塚直人さんの案内で長野県大鹿村へ。車を出していただいた伝宝さんは、龍樹菩薩ご応現後佐々井上人がナグプールへ旅立った直後のラージギルに八木上人を訪ねたという人で、道中インドの話で持ちきりでした。

大鹿村。今回の日程中格別の訪問地といっても良いかと思います。実は岡山で奉還町の一刻堂書店を訪れた際、吉備の歴史研究をしている森脇さんという女性が、「熊本の地震の後、中央構造線に沿って地震が発生しているが、次に危ないのは大地溝帯フォッサマグナ上のどこかで、しかも23日ごろが特に危ない。そのころ佐々井上人はどこにおられますか？」と言われ、スケジュール表を見ると21～23日に、まさしく大地溝帯と中央構造線の交接地点大鹿村に滞在予定ということで、「気を付けてくださいね。」とアドバイスをいただいていたのです。

それはともかく南アルプスの壮大な景観を正面に、天竜川を渡って小渋川沿いの道路を進んで行くと、大規模な浸食地形の大鹿村大河原に到着しました。中国地方の山間部とは比べ物にならない大自然を目の前に、しかしリニア中央新幹線の建設予定地となって問題を抱える大鹿村。ここには40年も前から自給自足自然との共存を目指した人々が移住して、現在3世代目300人を超えるコミュニティを作り上げています。そして、大河原の地は、太平記の主要人物後醍醐帝の第三皇子宗良親王が南朝の再起を期して30年間も暮らした地でもありました。昨年バンテジーは太平記の作者とも目される児島高徳の生誕地の五流尊瀧院に参拝し、太平記に着目して佐々井氏、宇喜多氏との関係等研究を重ね、一連の自身のルーツ探究に「大体分かってきた。」とのコメントも・・。

6月22日　大鹿村

リニア中央新幹線の工事が始まると、大鹿村に1日1700台のトラックが通行することになるそうです。そして赤石岳の真下を抜けるトンネル工事では大量の土砂が生まれ、村内にも一部堆積場が計画されています。その排出土砂によって埋め立てられる予定の釜沢地区の三正坊という古墳のような小高い丘で、生きとし生けるものに捧げる祈りの会「山河の集い」が行われました。

夜には八角堂という八角形のログハウスで、山本宗補さんのスライドトークとバンテジーを囲んでの交流会があり、子供から大人まで手作りの料理を持ち寄って楽しき夜ふけの会。コミュニティの長老的存在内田ボブさんが名曲「おおチェルノブイリ」を歌い、バンテジーは団扇太鼓をたたいて日本山妙法寺式で唱題されました。

南無妙法蓮華経　南無妙法蓮華経

かつて高度成長期の日本を離れ、ブッダガヤやラージギルの八木上人のところへやってきた青年たちは、その後平和と自然への同化を模索して、大鹿村に辿り着き、大自然の中に身を置いて自由に力強く生きてきたのです。しかしここにも正体のわからぬ何ものかが押し寄せてきました。その自然を大きく変え、その生活をあきらめるよう迫る得体の知れない何かが…。

佐々井上人の日本巡礼はそのまさしく最先端、得体の知れないものとのせめぎ合いの現場を訪れることが多いのです。それに飲み込まれていても気づかない人、仕方なくあるいは積極的に飲み込まれていく人、それから逃げそして抗っていく人。昔から世界中で住む場所を奪われ流民となって、流れ着いた先で生きていく、相手を打ち負かし滅び滅ぼしの修羅の世界から逃れる道を取った人々。流れ人であり逃れ人であり、ナーガ族とはそういう人々でしょうか。そういえば都を追われ地方で再起を図った後醍醐帝の皇子達は護良親王、尊良親王、宗良親王・・・と、良という字がついていて「なが」と読みます。

6月23日　名古屋

出立の朝、大河原の渓谷に龍雲出現。再び名古屋へ。南天会小池一郎氏のお世話で金龍寺での名古屋講演会に登壇されました。昨年高野山でお世話になった近藤堯寛師のご自坊で、本堂いっぱいに人が集まり、熱烈な歓迎を受けました。

6月24日　青森

小牧空港から一路青森へ。

出迎えの織田隆全師のご案内で岩木山に車上登山。つづら折りの岩木スカイラインを登って一気に霞に煙る8合目（1247m）到着。こんなところまで来れるとは、と思わぬ岩木登山に喜んでおられました。

余談ですが、青森県黒石市の大川原には、大鹿村の大河原で宗良親王を庇護した南朝の忠臣香坂高宗の一族が流れ着き、宗良親王や南朝の人々を偲んだ「火流し」という行事が伝えられています。また岩木山麓には後醍醐天皇の皇孫98代長慶天皇の御陵と伝える地もあります。

6月25日　恐山

さすがに青森は寒く、宿泊の青龍寺書院の部屋にストーブを出していただきました。この日は日本三大霊山と言われる恐山へ。車を借りて下北半島を北上しました。途中六ヶ所再処理センター、東通原発などの核施設の看板を続けざまに見送り、快晴の空の下美しい陸奥湾の景色とは裏腹な核との共存をめざす青森県の現状に、静かに考えるバンテジー。原発に反対する私の一方的な説明でしたが、「知らずに通ったんじゃ意味がないんだ。」と助手席で耳を傾けておられました。

恐山は天気がいいせいか、思ったより恐山風ではなく、しかし立ち上る硫黄の煙の中を歩いてお参りされました。バン

テジーは恐山のことを「きょうざん」と読み、大町桂月の句入りの恐山のお土産笠を買い、帰国まで被っておられました。

夜にはちょうど青森で開催された東北六魂祭を見学。震災後東北6県のお祭りが集まる大祭として開催され、ものすごい人出で祭りの中心部に入ることが出来ませんでしたが、身を乗り出してご覧になりました。

6月26日　青龍寺講演会

昭和大仏青龍寺で行われた講演。金堂に200人満席の中、山本宗補氏のスライドトークに続き、力強くお話されました。山本宗補氏撮影の佐々井上人の写真もパネル展示。北海道、大阪や四国からも青森に駆け付けた人もあり、なかなかの盛会でした。最後には、隆全師の太鼓に合わせ、来場の皆さんと般若心経を読経しました。

6月27日　福島　南相馬市

同慶寺田中徳雲師を訪ね、請戸海岸で読経。平野文興師が合流。（私佐伯はこの日から同行を離れております。）

6月28日　三春町から小美玉市

三春町福聚寺住職の芥川賞作家、玄侑宗久師と面会。和やかな対談となったようです。平野文興師のお師匠様のお寺、鳳林院へ宿泊。

6月29日　東京帰着

6月30日　山梨　内船寺

古くからの支援者、古屋由美子さんや内船寺平原ご住職夫妻のお招きにより、身延山麓の地へ。大勢の檀信徒の皆さんが団扇太鼓を叩いての大歓迎を受けました。

7月1日　内船寺講話会　身延山

内船寺にて講話会、昼食会。午後には身延山久遠寺へ参拝されました。地図で見ると、身延山の奥は赤石岳で、その向こうは大鹿村という位置関係。

7月2日　三鷹講演会

南天会会員の成清一夫さんが発意して市民の方を中心に開催された講演会。会場には立ち見も出るほどの盛会となったようです。夜には在日インド人仏教徒の方々による夕食会に出席されました。

7月3日　東京

南天会賛同人でもある黒澤雄太師範主催の「殺活自在の流儀」演武会と対談が行われました。黒澤氏のお弟子の日下部泰生氏による水絵画実演、真剣を使っての試し切りが行われ、高山龍智師の司会で佐々井上人と黒澤師範の対談が行われました。

7月4日　東京

神保町にて「ブッダの道を生きる」佐々井秀嶺師×アルボムッレ・スマナサーラ長老頂上対談に参加。

7月5日　東京

浅草木馬亭にて　玉川奈々福さんの浪曲を鑑賞、取材などを受けました。

7月6日　帰国前日

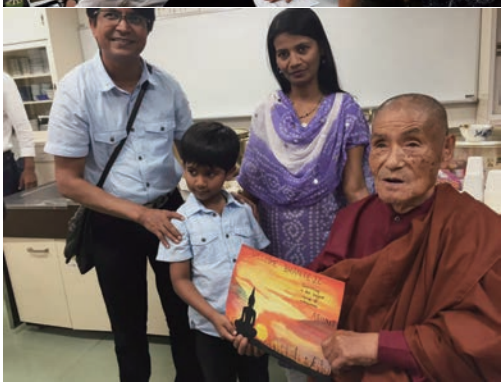
7月7日　インド帰国

今年の来日は講演会などが相次ぎましたが、健康に過ごされ、また懐かしい人に大勢会い、にこやかに過ごされたのが印象的でした。

今生に合い　あううれしさよ

佐々井秀嶺

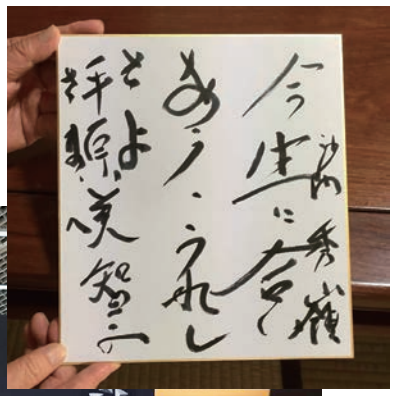
内船寺ご住職のお母様に贈られた色紙に揮毫された一句。笑顔の対面、涙の出会い、何を求めて、仏縁に引き寄



せられて、今年も大勢の人がバンテジーに会いました。

今回も、南天会会員をはじめ全国の方々よりあたたかいご支援を賜り、無事全日程を完遂することが出来ました。私の調整不足により、ご迷惑をおかけした方には心よりお詫び申し上げます。

佐々井上人には今後もインド、日本で様々な活動を展開される予定ですので、また是非ご協力ご注目いただければ幸いです。



6月26日

佐々井秀嶺上人青龍寺講演

織田隆全

「やるぞー！ということです。俺がやらなきゃ誰がやる！ということですよ。」

六月二十六日、佐々井上人青龍寺講演で、参加者からの質問に対し、上人は即座にこう答えられた。質問は次のような内容であった。

「上人の多岐にわたる活動の源、かきたてるものは何ですか？」

これは私が問うてみたいと思っていた質問でもあった。見知らぬ異国の地で、差別と貧困に喘ぐ不可触民たちの間に分け入り、寝食をともにし、人々の求めに一つ一つ応えることにより絶大な信頼を得て、インド仏教復興運動の先頭に立ち、大菩提寺奪還闘争を敢行、龍樹菩薩の遺跡を調査発掘を独自に進めるなど、どれ一つとっても一大事業である。これだけの活動を起こすには、相応する動機と想像を絶する情熱が必要であり、その情熱が湧き起こってくるなにものかがあるはずなのだ。

我は龍樹なり
汝速やかに南天竜宮城へ行け
南天竜宮城は我が法城なり
我が法城は汝が法城
汝が法城は我が法城
汝速やかに南天竜宮城へ行け
南天鉄塔亦そこにあらんか

この龍樹菩薩の啓示が佐々井上人を突き動かす根源であると私は観ていた。目の前に突然白髪の老人が現れ、何事かを告げて忽然と姿を消す。俄には信じがたいことであり、このことを証明することは誰にも出来ない。しかし、上人はこの啓示を真っ直ぐに受け止めて、多難の道であるにもかかわらず啓示に従って歩まれている。上人の人生において極めて重大な体験であったことは間違いないであろう。だから冒頭に記した上人の回答は、龍樹菩薩に対する思いを熱く語ることを想像していた私にとっては、肩透かしを食った感があった。

ところが、あらためて上人の言葉を反芻してみると格別の重みをもって響いてきた。

「俺がやらなくて誰がやる！」

上人以外に出来る者はいないということではない。不可触民の置かれた悲惨な状況を知ってしまった以上は、見過ごすわけにはいかない。アンベードカル博士の仏教改宗への思いや壮絶な被差別との闘争を知ってしまった以上、インド仏教復興運動の火を絶やすわけにはいかない。仏教の聖地大菩提寺がヒンズー教徒の管理下に置かれている状況を見た以上は、仏教徒の手に取り戻さずにはいられない。義侠心、義憤、反骨、同体大悲。インド仏教徒の苦しみに寄り添っているという表現ではまだ遠く、インド仏教徒の苦しみ「即」上人の苦しみということなのだ。そして腹の底から「やるぞー！」という雄叫びとともにエネルギーが、闘争心が湧き上がってくるのである。

「一切衆生を見ることなおし己身のごとし」

これは弘法大師が『三昧耶戒序』に説くところの、菩薩道を歩む者が片時も忘れてはならない心である。佐々井上人は啓示に突き動かされているわけではなく、啓示によって縁じた地、ナグプールに居を移して、ただただまっすぐにご自身の菩薩道を歩んでおられるのだ。

菩薩道はかつて龍樹菩薩が示された道である。悟りを目指して自らの修行に専念するだけでなく、苦しみの中にある衆生を積極的に救う「利他行」が旗印として掲げられた。利他行を行うには智慧と慈悲が両輪となって働かなければならない。龍樹菩薩が大成された空とは、あらゆる存在や現象は他との関連、相互依存によって成立しており、他との関連なくして成立するものは一つとして無いということ。この空観を深めることによって我という執著をはなれて「己身」のごとく他を見る慈悲が生じてくる。

辞書的な説明だけではなかなか分かり難いので、私が高野山で修行した時に指導を賜った和上様の話を紹介させていただきたい。

若かりし頃、大きな挫折を経験したことを機に高野山で仏教を学びはじめた師は、どうしても慈悲ということが受け入れられなかったという。「慈悲で渡っていけるほど世の中は甘くない。」と、偽善的に感じていたのだ。数年学んでも得心が行かず、山を下りて百姓として三年ほど畑仕事に従事した。ある日、自分の畑から人参を一本引き抜いたところで、はたと気づいた。この人参は自分が育て

たのだろうか？いや、土の養分、適度な水、温度、気候、太陽……適する環境が調ったから必然として自ら育った……。全知全能の神がいてこの人参とまったく同じものをつくるとすれば、地球がなくてはならない、太陽がなくてはならない……宇宙の始まりからスタートしなければならない。つまり、たった一本の人参の存在が全宇宙と繋がっている。

「これに気づいた時、殺してやりたいと憎んでいた人のことも自分なんだなと思うことが出来た。やっぱり慈悲なんだということが分かった。空というのは連鎖反応だ。」

宇宙大に広がる壮大なドミノ倒しの牌が次々と倒れていく波のような動きが個々の存在や現象であるとすれば、佐々井上人は動きを止めかかっている牌を見つけてはその背中を押し、方向を一方に調え無数の波を集めて、容易には倒れない巨大な牌を倒そうとしている。一人でも多くの人々が菩薩道という流れに合流し、大きな大きな龍のようにならなければならない。

数年来の念願が叶い、佐々井上人の講演会を青森の地で開催出来たご縁に感謝したい。

7月3日

「道がなかったら歩けねぇじゃねえか」

バンテージーをむかえての真剣試し斬り奉納演武と対談の会『殺活自在の流儀』から剣士は何を得たか

日本武徳院試斬居合道　殺活自在流　黒澤龍雲

Photo:
Nori Uchiumi

古くは武道を武術、剣道を剣術など、「術」と称することが多かった。それは正に実践的な技で、目的を達成するための技術だった。

しかし我々の先祖は、実践的技術だけに止まることを良しとせず、そこに精神性や哲学性、宗教性などを加味して渾然一体とし、「術」を「道」に深化させた。

だとすれば現代武道は、その系譜にあるものが正統である。つまり、武道家は道を志し、そうでない者は、やっていることが例え武道と称されることであっても、それは武道ではなく外道だということだ。

道を志し、道を歩むということは武道も仏道も同じ、むしろ武道は仏道の大きな影響のもと、人殺しの技術を、人も己もいきる道に転換したのが歴史の事実であり、私の武道人生の実感でもある。であるならば、仏道は武道の師でもあり、母でもあると言えるかと思う。

去る7月3日、四谷真成院本堂にバンテージーをお迎えして、真剣試し斬り奉納演武と対談の会『殺活自在の流儀』を行った。発案は南天会の佐伯さんと話していた時にパッと閃いた直観で、いま自分がやらなければならないことの啓示だった。

当日はお陰さまで１００人を超える人に参加いただき、本堂がいっぱいになった。

まずはバンテージー、真成院の織田住職、バンテージーの弟子の高山さん、南天会の佐伯さんと私が内陣に入り、参会の皆さんも一緒に般若心経を読経した。さすがにこの会に来るくらいの方は意識が高く、般若心経はすらすらと読めるようで、皆さんの声が本堂に響き渡り、厳粛な一体感で会がはじまった。

次に私の真剣試し斬り奉納演武であるが、これに関しては言葉で説明しても仕方ないと思うので、興味がある方は南天会の小林三旅君の撮った映像が youtube にあるので、そち

らをご覧いただきたい。

一言だけ申せば、ご本尊さまと一体となって、いままでの奉納演武にはない境地で刀を振るえた実感があり、ここで得たそれは、今後、剣の道を歩む上で大切な水脈となるだろうと感謝している。

さて、いよいよ再びバンテージーに内陣にあがっていただいて、このパートの仕切り役を御願いした高山さんとともに対談がはじまる。テーマは仏道と武道との繋がり、その過去から現在いまここまで明らかにするということだ。

それは私の視点からみれば、武の道と仏の道を先人たちがどう一致させようとしてきたのか、その先人たちの智慧を我が血肉として、今後私がどのように道を歩んでいくのかを、本尊、師、弟子、有縁の皆様の前で表明する大切な機会だということになる。

そのための切り口をいくつか用意して対談に望んだが、望み通りにいくものもあれば、こぼれ落ちるもの、思わぬ方向に発展するものなどもあり、とても楽しく有意義な時間だった。その中から、いくつかを紹介したい。

禅では「無念無想」といい、その影響を受けた武道流派は「無念無想で打て、斬れ」と言うが、私はむしろ「有念無想」で、斬るという一念に徹し、それ以外を想わないのが正しいのではないかとバンテージーに問うた。

するとバンテージーは、真言密教では念がないとダメだ、念というのは自分を固めることで、むかし実践した念力の手刀で氣合一閃、木を真っ二つに斬る修行の話をしてくれた。ここがバンテージーの面白いところだが、氣合一閃、手刀で真っ二つにした木を、返す刀で再び氣合一閃すると、真っ二つになった木がくっつくんだ、と子供のような笑顔で言う。さすがに高山さんが「本当ですか」と突っ込んでいたが、バンテージーは「本当だよ、嘘なんか言うか」と返していたので、きっと事実ではなくとも真実なのだろう。

バンテージーは、インドでも物憑きや狂人、化け猫憑きなどに念で対し、氣合一閃で退散させるそうだ。これも確かに納得できる話で、念の力と、それを発動させる手刀や氣合には、そういった超自然的な力がある。もちろん行者としての実力や、その力を自利で使うのか、利他で使うのかといった根本的な問題はあるが、利他行に徹しているバンテー

ジーのような人には、そのような力が備わっていて不思議ではないと想う。

次の話題は「空」についてだ。斬ることに精通しながら、斬ることを放り投げる、そういう心境にきていると申し上げたら、バンテージーは仏道の空と武道の空の究極は同じ、だから武人は空を識る、何かに執着し固まってしまわぬためにだ、と答えた。

老化というのは年齢ではなく、心も身体も固まってしまうことを言うのではないか。その原因は執着だ。金や物に執着し、地位や立場に執着し、生に執着する姿を老醜と言うのかもしれない。バンテージーにはそういう面がない。それは正しく「空」を識るからであり、それが若さの秘訣なのかもしれない。

さて、いよいよ「道」についてだ。高山さんから、現代では多くの人が道のプロセスと、それにかかる時間の長さを面倒くさがり、手軽にできるもの、答えが容易に見つかるものなどを求め過ぎ、それがかえって人々の心を不安にさせているのではないかとバンテージーに水を向けた。すると答えて曰く

「道がなかったら歩けねぇじゃねえか！」

つづけて曰く、武道に限らず、すべてに道がある。人生いかに生きるべきか、我々は何をなすべきかという道がそれぞれにある。道を見失ってはならない。

私は今これを書きながら、仏道や武道というのは、その道標なのではないかと確信する。人生は長く、答えは容易に見つからない。だからといって安易な方向に流されてばかりいると、結局は道を見失う。迷子くらいならかわいいが、遭難して行方不明、虎に喰われて跡形もなくなることだってある。

道を求める生き方、つまり「求道」は辛くしんどい面もあるが、道に迷うことはない。歩む道には必ず先人達の遺した道標があり、ここはあの人の歩いた道、この道標は彼の人のものと、ひとつひとつを大切にしているうちに、あるべき場所へと導かれる。

容易に見つかる答えは本質的な問題を解決せず、また再び容易に迷いだす。しかし、苦労して得たものは、自分の生きている間、たえず血肉となり、エネルギーとなる。そのエネルギーを循環させ、磨きをかける場所を道場と呼ぶ。現代人に最も欠けていて、本来最も必要なのが、このようにして道を追求する場なのだ。

最後は「殺活自在の流儀」の名乗りだ。私は今まで流儀を名乗らず、道場の名前だけで活動してきた。なぜなら、流儀の名前には微妙な問題も含んでおり、明治の廃刀令、武士の消滅から、太平洋戦争敗戦、占領軍による武道禁止令まで、武道流儀の断絶が百五十年近くにおよんだ今、果たして正統だと証明できる流儀がいくつあるのか、おおいに疑問である。

それと、流派や継承者を名乗る人の人間性の問題がある。中には真っ当な人もいるが、大半はどうにも腑に落ちない面々ばかりだ。剣の実力もそうだが、それ以前に求道者ではない。ただの自己顕示欲や自己満足、つまり自利だけで流派や継承者を騙っているだけの凡俗の輩が多い。

と同時に自分の剣境の至らなさもあった。今までは、自分は、それら凡俗と同じ穴のムジナだと思われたくないという器の小ささがあったことは否めない。

そういったことがあいまって流儀の名前を名乗らなかったのだが、今回有難く機が満ちて「殺活自在流」と名乗ろうと閃いた。

なぜ「殺活自在」なのかというと、刀である限り殺が先で、刀の美しさとは、殺の機能を突き詰めた結果うまれた美であり、美を追求した結果うまれたものではないからだ。

しかし、最前から語っているように、殺だけで終わらせてはいけない。活に転化しなければならない。それが先人達の目指した境地であり、それが武道の「道」である。自分はそれを正しく継承し、さらに現代に生きる人々に求道の楽しさを、道場を中心に、もっと広く知らしめないとならない。

そういった志をバンテージーに話したところ、快く名乗り親を引き受けてくださった。

「殺活自在流　第一世　黒澤龍雲　南天沙門　秀嶺　その名乗りを許す」と宣言していただき、めでたく会が終わった。本当に有難く、貴重な時間だった。

この会の実現のために協力いただいた方々に、この場を借りて御礼申し上げます。特に真成院の織田住職とお寺の皆様、佐伯さん、司会をしてくれた高山さん、中村さん、映像の小林さん、会の名を墨書にした関口さん、南天会の皆さん、それと私の剣の道を支え、共に歩む道場の門弟たち、ありがとうございます。

バンテージーの求道を引き継ぎ、活動を広めるため、今後も精進してまいります。どうぞ皆様の変わらぬお力添えをよろしくお願い申し上げます。

日本武徳院 www.butokuin.com

※この対談の模様をYouTubeで配信中
https://www.youtube.com/watch?v=EJC1plk5Oz4

シルプルより。（4）

インド・シルプル在住
平野文興（大顕龍興）

シルプル買い物事情・食べ物事情

お寺に一人暮らしですから、食料や生活用品は買いに行かねばなりません。

言葉が不自由なので、買い物が億劫であります。

しかし、そんな事も言ってられません。基本的な食材としての米、小麦粉、豆、野菜、調味料としての砂糖、塩、香辛料などはナンディシュワルご夫妻（私の世話をしてくださっています）が時々来てくれて用意しておいてくれますが、それらも無くなれば買いに行かざるをえません。

これがどうも億劫なのです。

言葉が不自由ですし、日本の商店の様に値札が付いていて、それらがいくらなのか判れば、買った品物の大体の支払うべきお金は判りますが、それが無いのでいちいち品物ごとに聞かなければなりません。

しかも、その値段が相応の価格なのかどうかが判らないのです。

言われるまま支払うと、知らなければそれはそれで済みますが、後でそれが相場なのかどうか知ってしまうと、後悔するのです。

特に、タクシー（前回お伝えした三輪のオートリクシャー）などはその代表的なものです。日本のタクシーのようなドアーがついているタクシーではないので、その料金は日本円にしたら安いとは思うのですが、代金を払った後で怨めしく思う事があります。

しかも、後から他の客が乗り込んできたりします。それでも安くはなりません。

数字も、英語であれば何とか判断できますが、インド独特の言い方で大変覚えにくいのです。

ですからついつい、相手の言いなりになってしまいます。言葉を操れないのはかなりストレスであります。億劫なのです。

基本的に料金は常に交渉次第で決まります。交渉能力が必要となってきます。

しかし、考えてみれば当たり前のことなのだ、という事に気づきます。料金というのは初めから決まっているわけではなく、必要とする側とそれを供給する側のバランスでその値段は決まってくるのでした。

シルプルでは毎週木曜日に村の中央部にあるバスの終着点の近くの広場で市場が開かれます。週に一度の青空市場なのですが、雨でも降れば水びたしになり市場は閉鎖です。

ブルーシートや麻のござの上に、農家の人達が自分で作ってきた作物でしょうか、ジャガイモ、トマト、人参、ピーマン、大根、人参、きゅうり、かぼちゃ、見た事もなかった野菜などなど。あるいは何処からか仕入れてきた品物でしょうか、麻袋にたっぷり詰め込まれた豆類や香辛料などを路上に並べています。

全て天秤ばかりを使った計り売りです。

服や履物、玩具なども並んでいます。

それらを扱う商人や、近隣の農家の人たちがあぐらをかいて、通り行く買い物客に呼びかけています。

人口１５００～１６００人くらいの小さな村ですが、この日ばかりは買い物袋をぶら下げた老若男女が集まって、行き交う人と肩がぶつかり合うほどの賑やかさになります。

買い物客は見た感じでは男性の方が多く、買い物は男の役割なのだろうか？財布の紐は男達が握っているのだろうか？それとも殆どオートバイや自転車でやってくるからかなぁ？などと思ってます。

牛も、買い物袋こそ下げてませんが、賑やかさにつられてかやってきます。お金を払わずに食べ物が手に入るのです。しかし、気を利かしたつもりの暑さ対策なのか？頼みもしない「水まき」をしたり、「落し物」もしていくので周りの人に尻を叩かれ叱られたりしてます。

魚も売っています。肉も売っています。でも冷蔵庫なんぞはありませんから、それらは強い日差しの中、喉の乾いたハエたちには最高のごちそうが揃っている食卓です。彼らは追われても追われても素早く元のテーブルに戻っていきます。

その集団が群舞する中、店主は出刃包丁を巧みに使いながら、魚は丸のままぶつ切りして天秤ばかりで計って売ってます。

それらは近くを流れる河や湖で取れたコイ、フナ、ナマズ、その他魚の名が詳しくないので名が分りませんが、いわゆる川魚です。私の場合、海の近くで育ちましたから海の魚は馴染んでいるので美味しいと思いますが、川魚は泥臭くてどうも馴染めません。

ま、インドの人たちも、このニオイ対策として香辛料をたっぷり使って油で揚げて食べることが常の様な感じです。

肉類についてはご存知の様に、ヒンドゥー教徒は牛肉は食べません。でもイスラム教徒の多い地区では売ってはいる様です。ヤギ肉は食べる様です。豚は子連れでごみ捨て場を漁っているのを見かけます。野良豚か？或いは何処かで飼っているのかもしれません。食べるのかなぁ？（イスラムの人達は当然食べないと思いますが……）

でも私は鶏肉しか見た事がありません。

籠に入っているニワトリを選んでその場で絞めてもらい、頭を落とし、沸かしたお湯に浸しながら羽をむしりとって鳥肌にしたピンク色の体を、まな板の上でぶつ切りにしてこれも計り売りです。

新鮮な鶏肉には間違いありませんが、ついさっきまで生きていた鳥のその現場を目にするとどうも食欲に影響してきます。実際一度だけ買って、唐揚げにして食べたことがありましたが、日本で買う鶏肉の様にはいきませんでした。ぶつ切りのせいか、食べた時、細かな骨がときどきひっかかっていけませんでした。

それ以来、動物性のタンパク源はもっぱら、たまご一本やりです。

このたまごも、日本のそれとは少し趣きを異にします。

大抵、茶色い糞がくっついています。また殻が薄いのです。初めの頃、割る時にいままでの感覚で力を入れてしまい、中身を全て足の甲や床に落としてしまったことがありました。かなり慎重に割らないと今でも失敗する時があります。ですから片手で割って中身を器に受けるなんてことは先ず無理です。

その中身がまたチョイと趣きが違います。黄身の盛り上がりに勢いがありません。白身もなんとなく元気が無く、当初はずいぶん古いのをつかまされたのかなぁと思ったものでしたが、店を変えたりして何度か買って来ても殆ど同じです。高温の場所で保管され、更に炎天下で売られているからかな？などと想像してます。

炊きたてのご飯に、醤油＋生たまご。

私はどんな料理よりもこれが一番美味い！と思ってます。

でも、こちらのご飯が細長いパサパサしたお米なので、これに元気さに欠けるたまごをかけてもどうもなあ～？という感じですが…

ま！いいか！小欲知足……小欲知足……と言い聞かせてます。

インドの人達はたまごかけご飯食べないんでしょうか。今度、聞いてみたいと思います。

今でもなかなかインド食に馴染めませんが、お腹が空いてさえいれば大抵のものは美味しく食べられるもんだなあとも思います。

永平寺にいた時もそうでしたが、入山してからしばらくの間は、食べ物が大変少なく、一日に必要なカロリーに足りないのです。

修行僧の多くがこの飽食の時代と言われる中、脚気を患います。太っていた人も急に痩せていきます。痩せるのが目的で入山した、と言っていた者もいました。脚気は永平寺の名物なのだ、とも聞きました。

私は歳のせいか、３ヶ月過ぎた頃から入山仲間の内で最初に足がむくんできました。

のども妙に乾いてきます。渇きに耐えられず、トイレで用を足した後、便器に流れる水をすくって飲んだこともありました。トイレの手洗い所には先輩僧の目が光っていて、一挙手一投足監視されていますから、手洗いのついでに水を飲むなんてとても出来ないのです。

入山時の厳しい持ち物検査を潜り抜けるため、血圧の薬です、として何とか持ち込んでいた栄養剤を服用していても効果はありませんでした。

空腹の日々で、お米ばかりを食べていたせいです。周りに隠れて、残飯を盗み食いした事もありました。

回りは殆どが若者達ばかりなので、彼らは何ともないんだろうな、と思っていたのですが、後で分かった事ですが、彼らも栄養剤を飲んだり、先輩僧がこっそりと差し入れてくれるもので空腹をしのいでいた様です。

彼らは殆どが駒沢大学の出身で、先輩僧がいてくれたのです。私には先輩僧がいませんでした。

食べ物を美味いと思って食べられるのは幸せなことだと思います。

空腹で空腹で、食べるものそのものがない時、目の前に食べられるものがあったら、つい手を出してしまいます。味わって食べるなんて論外です。

そこに、仲間が居ても、仲間の事なんか思いやれる余裕なんてありません。少ない食べ物を我先にと取り合う状況が現出するのです。

食べ物があるだけで、有難い事だ、とも思います。

こんな事を思い起こさせてくれるシルプルでの生活は今の私にとって、必要な事の一つなのだ、と思っています。

今回はこれにて失礼します。ではまた。

『龍族』は、皆様からの寄稿をお待ちしております。

佐々井秀嶺上人に対する思い、研究の成果など
様々なテーマで広く受け付けております。

・原稿は事務局宛にメールまたは郵送でお送り下さい。
・使用したい写真等の素材がございましたら同封下さい。
・連絡の取れる電話番号やメールアドレスを忘れずにご明記下さい。
・掲載の可否および時期につきましては編集部にて決めさせて頂きます。
・原稿料等はお支払い致し兼ねますので、予めご了承下さい。

マンセル遺跡について

中村　龍海

日本人チームによるマンセル遺跡（再）発掘プロジェクトが進行中である。一九九七年―二〇〇四年に佐々井秀嶺師率いる龍樹菩薩記念研究協会がインド人考古学者達と行った本格的な発掘以来、マンセル再発掘の機運が今最も高まっていると言える。そのマンセル遺跡の概要と今後の計画を簡単にご紹介しようと思う。

マンセル遺跡（北緯二一度二三分、東経七九度一六分）は、インドマハーラーシュトラ州の州都ナグプールから北東に約四〇キロメートルの地点に位置する小山上にある複合遺跡群である。過去の発掘からマンセル遺跡には四つの主要な歴史時代層があることが明らかになった。即ち、一、マウリヤ-シュンガ王朝時代（紀元前三〇〇年―紀元前二〇〇年）、二、サータヴァーハナ王朝時代（紀元前二〇〇年―紀元二五〇年）、三、グプタ-ヴァカタカ王朝時代（紀元二七五年―五五〇年）、そして、四、ヴィシュヌクンディン王朝時代（紀元五五〇年―六二四年）である。特筆すべきはこれらの時代区分の内、第三のグプタ-ヴァカタカ王朝時代のみが比較的ヒンドゥー教色の強い時代で、それ以外の三つの時代は仏教時代であると（反仏教的先入観を持ちやすいヒンドゥー教徒考古学者達によってさえ）認められていることである。現時点での考古学的成果から、マンセルは紀元五世紀後半のヴァカタカ王朝のプラヴァラセーナ二世王の首都プラヴァラプーラ、及びプラヴァレーシュヴァラ寺院と同定されている。同考古学者達に拠れば、この王ですら古代インドの主たる王達と同様、ヒンドゥー教と同時に仏教等の宗教も寛大に庇護していた傾向がうかがえると言う。（図1）

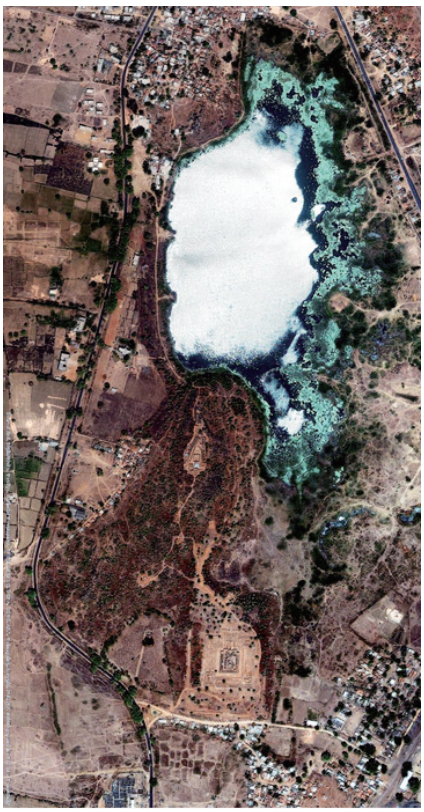


図1：マンセル湖とマンセル遺跡の人工衛星写真

今最も「南天鉄塔」である可能性が高いマンセル第三遺跡（MNS3）からは、同地が仏教遺跡であることを示す四基の仏塔が見付かった。「深さ三・九〇メートル、岩盤の直上に建てられた、直径八・〇メートルの煉瓦造りの仏塔があった。煉瓦の寸法は、四六センチ×二二センチ×七センチである。東側には、元の小山の傾斜した線上に、階段が作られた。波打つ地面を望みつつ、仏塔へと近付く為に、地面は一・五五メートルの高さまで打ち固め上げられ、三十八の横の層の広がりを有つ壁が起こされた。…この第一仏塔の崩壊直後、1B期に、この時小岩、煉瓦片、土でいっぱいにされた長方形の諸房を作ることで、別の仏塔が建立された。房の寸法は二・五〇メートル×一・五〇メートルから、二・五〇メートル×一・一〇メートルの多岐に渡る。これらの一つで、四二センチ×二二センチ×八センチ寸法の煉瓦の、三十四の横の層が掘り出された。この仏塔の場所から、石灰岩の舎利容器の底部と把手とが出土した。この仏塔が使用されなくなった後、厚さ一・二五メートルの文化的堆積物がその上に積み重なった。」1「明らかに、これら二基の仏塔は、マウリヤ朝後期とシュンガ朝前期の間に建立された。この時代についてはまた、ヒディンバ山（テークディー）の南東角に、長さ八メートル（南北）、幅五・五〇メートル（東西）の楕円形の祀堂（チャイトヤ）が掘り出されている。この北側に偶像の為の、長い、〇・八〇メートル幅の台座があり、一方、入り口は西から入る。」2ここにも述べられている様に、仏塔の傍からは複数の舎利容器と仏舎利が出土しており、マンセル遺跡の仏教的特色を強調している。

マンセル遺跡を特徴づけているのは、その基壇部や柱部に見られる蓮華状の意匠（モチーフ）である。「垂直に、全ての祠が、諸の三角形と逆三角形（正三角形）を採用して、蓮の蕾の形に建てられた。最終的に指向する端に向かって収束し、尖塔（シカラ）の閉じた屋根を作っている花弁を掲げる為の数々の手法が採用された。この複合建造物（コンプレックス）全体が石灰漆喰で塗られた、明白な証拠がある。…斯の数々の三角形、殊に一列の祠の脚部（ジャンガー）のものは、人の顔をしている。各祠の大部分に、東か西からの入り口があり、幾つかには小張出玄関（マンダパ）と、階段の近くに貯水の為の小さな半円か三角形の水溜（クンダ）がある。祠の一つでは、傾いた自然石直下の、四角い煉

瓦台座の上に、リンガが保たれている。」3この様な蓮華状の意匠は、インド広しといえどもマンセル遺跡にしか見られない独特なものであり、遺跡に隣接するマンセル湖に群生する天然自然の白蓮華や紅蓮華と相俟って、同遺跡と『妙法蓮華経』との何等かの関係を示唆するものと言えるかも知れない。(図2)

マンセル遺跡には大乗仏教の開祖の一人と看做される、古代インドで活躍した龍樹菩薩にまつわる遺跡と推測できるだけの考古学的・文献学的な様々な証拠がある。その中の一つが、法顕や玄奘といった古代中国からインドへの巡礼僧達が残した記録である。法顕はその旅行記『法顕伝』(別名『仏国記』)の第四章「達嚫(ダクシン)国」の条で、玄奘はやはり自身のナーランダ大学留学を含めた旅行記『大唐西域記』の巻十・一二「憍薩羅(コーサラ)国」五「黒蜂山」の条で、それぞれ龍樹菩薩の根拠地・法城について記録している。法顕(五世紀頭)に拠れば遺跡の名前は「波羅越(*Bo-luo-yue*)」即ちサンスクリット語の *Pārāvata*(鳩)/*Parvata*(山)。玄奘(七世紀)に拠れば「跋邏末羅耆釐(ピンイン: *Ba-luo-mo-luo-qi-li*; 言語学的発音: *b'uat-la-muat-la-g'ji-lji*)」即ちサンスクリット語の *Bhramara*[*giri*](黒蜂山)。「引正王(サータヴァーハナ)」が龍樹菩薩のために岩山を穿って五層の楼閣を建立し、そこでは各房の間を水が巡り流れ、徐々に下層に流れ下るというが、マンセルでは実際に高度な設計技術を用いて建造・運用されていた、(三層の)楼閣の部屋々々を巡る水路や、壁から流れ落ちる人工的な滝等の跡が観察されるのである。そして何より、前述の「プラヴァラプーラ」や「プラヴァレーシュヴァラ寺院」という遺跡名の比定はマンセルから出土した「*Pravara*(*sya*)」と刻まれた印章に基づいているのであるが、この「*Pravara*」という名称が、今までどこにあるか謎とされていた「波羅越」や「邏末羅(耆釐)」と酷似している上、「波羅越」(五世紀頭)→「*Pravara*」(五世紀)→「跋邏末羅(耆釐)」(七世紀)という変遷を示す、ミッシングリンクとなっていることが注目される。これらの旅行記とマンセルの考古学的特徴との一致については、また稿を改めて紹介したいと思う。(図3)

図2：マンセル遺跡に特有の蓮華状の意匠

図3：高度に調整された壁上の人工滝や水路の跡

マンセル遺跡からの出土品中、最も重要なものの一つが「龍樹菩薩の首なし像」である可能性がある胴体だけの彫像(トルソー)である。「…横たわり南を向いた、身長三・〇メートルで身を屈めた状態の、健康そうな男性像の石灰岩…(は)右脚が左脚の下に置かれた状態で、両脚とも折り曲げられている。同像の頭頂から爪先までの長さは、最大二・一〇メートルである。一方、幅は臀部で最大〇・九〇メートルである。胸部より上の部分は、儀式の間に粉砕された状態で見付かった。煉瓦の中から、切断された額部と、大きな両眼を示す頭部の諸断片が出土した。その胸部に、木の竿(ユーパ)を固定する為の楕円形の穴を伴う、五〇センチ×五〇センチ寸法の、四角形の煉瓦祭壇(ヴェーディ)が見付かっている。腰部の上の部分には、馬蹄形をした数々の、一五センチ×一三センチ×一六センチ寸法のよく彫刻された煉瓦が積まれている。…膝部直下に土製の甕が置かれたままであり、膝部の南東の方には、赤色土器の別の甕が横たわっている。人物像の周囲全体に、主として異なる大きさの釘、戸口の側柱、鎹(かすがい)等から成る多数の鉄製品が見付かっている。左足の直下、爪先の南東の方に、人物像の方を見つめ、傘を擡げた鉄の蛇が、黒色土器の破片の上に置かれたままである。人物像の南西角には、小さな軟体動物の貝殻で装飾された『輪(チャクラ)』の模刻が顕著である。…(仏塔の)二房の壁々の外面には、ヴァカタカ王朝に典型的な建築法と言える三角形の意匠が付加され

ていた。」4当時報告書をまとめたヒンドゥー教徒考古学者達はこの像が「人身供犠（プルシャメーダ）」を象徴的に表した像であるという珍説を述べ、また同像上の法輪（ダルマチャクラ）と思しき印は、「人身供犠」を行った「転輪聖王（チャクラヴァルティン）」としての性質を表しているとするが、通常、彫像乃至その台座上にある法輪は、その像が仏像であることを示すマークであることが多い。ちなみに上述の玄奘の『大唐西域記』の記録の直前部、巻十・一二「憍薩羅（コーサラ）国」四「龍樹の死没」に龍樹菩薩の最期についての伝承が記録されているが、それに拠れば龍樹菩薩は「引正王（サータヴァーハナ）」と共に不老不死の妙薬を服していたため、王位継承の可能性に絶望した王子にその首を懇望され、自ら乾いた茅の葉で首を斬り落したのだと言う。上述の遺跡名の酷似、水路等の考古学的遺構との一致に加え、龍樹菩薩の最期の姿を模したが如き首なし像の存在は、やはりマンセルが龍樹菩薩にまつわる遺跡である可能性を示唆するものであるかも知れない。同像の足下部から見つかった「鉄の蛇」や、周囲の壁に見られる三角形を組み合わせた「蓮華状の意匠」もこれを裏付けるものであろうか。（図4）

図4：「龍樹菩薩首なし像」と推測されるトルソーと法輪

現在、ボーリング調査と古代の坑道再掘削を中心とする日本人チームによる発掘は、デリーとナグプールのインド政府考古局（ASI）への申請を終え、その許可が下りるのを待っているところである。また現実問題として発掘にかかる費用を調達・捻出する必要があるので、何等かの窓口を設けて寄付を募ったりすること等を計画している。実現すれば画期的な発掘となるので、無事許可を得て発掘を遂行し、またその詳細を報告できることを念願している。

参考文献

Joshi, Jagat Pati and A.K. Sharma. "Mansar Excavations 1998-2004: The Discovery of Pravarapur." Puramanthana, No. 3 (2005): pp. 1-26.

Joshi, Jagat Pati and A.K. Sharma. "Excavation at Mansar, Disttrict Nagpur." Indian Archaeology - A review, 1998-99 (2004): pp. 114-116.

---

[1] Jagat Pati Joshi and A.K. Sharma, "Mansar Excavations 1998-2004: The Discovery of Pravarapur," Puramanthana, No. 3 (2005): pp. 7-8.

[2] Ibid: p. 8.

[3] Jagat Pati Joshi and A.K. Sharma, "Excavation at Mansar, Disttrict Nagpur," Indian Archaeology - A review, 1998-99 (2004): pp. 114-116.

[4] Jagat Pati Joshi and A.K. Sharma, "Mansar Excavations 1998-2004: The Discovery of Pravarapur," Puramanthana, No. 3 (2005): pp. 11-12.

◆南天会現況（平成二十八年八月二十七日現在）

正式会員数　152名

賛同人（五十音順・敬称略）

岩佐澄隆（仏国土をつくろう会会長）
漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）
奥平心月（釣月庵庵主）
織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）
黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）
小池一郎（株式会社マクシス・シントー常務取締役）
島影　透（株式会社サンガ社長）
高山龍智（佐々井上人お弟子）
土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）
冨士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）
宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職・長野県修法師会会長）
宮本光研（真言宗御室派元執行）
宮本龍勝（佐々井上人お弟子）
山本宗補（フォトジャーナリスト）

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、お名前を公表させて頂いております。賛同頂ける方は是非お申し出ください。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会会計報告（2016 年 3 月 16 日～7 月 31 日）

収入の部	
摘要	金額
前期繰越金	95,138
会費・支援金（振込以外）	890,000
会費・支援金（振込分）	1,055,000
交流会・講演会カンパ	38,100
書籍売上	279,300
合計	**2,357,538**

支出の部		
項目	詳細	金額
交通費	国内移動（鉄道利用）	141,820
	国内移動（飛行機利用）	57,000
	タクシー代	99,500
	その他車両関係費用	2,975
	随行者インド―日本往復旅費援助	70,000
	第4次滞在支援隊援助※1	150,000
	上人ブッダガヤ旅費南天会負担分※2	31,400
	小計	**552,695**
宿泊費	岩国ホテルAZ（4名）	17,280
	京都法華クラブ（4名）	42,000
	小計	**59,280**
通信費	龍族・来日案内等発送	91,944
	荷物送料（講演会用本等）	11,668
	荷物送料（インドへ）	43,000
	小計	**146,612**
講演会諸費用	京都講演会経費（チラシ作製、登壇者謝礼等）	47,540
	青森講演経費（講師交通費援助）	20,000
	サンガ対談資料コピー代	1,350
	小計	**68,890**
その他	龍族6号製作費（宣伝用改訂版含む）	80,584
	販売書籍購入	134,362
	上人購入品費（本、薬等）	53,833
	上人プリペイド携帯、チャージ料金	13,000
	食事代	19,534
	参拝寺院・神社へ御供え・土産代	17,864
	散髪代他	4,320
	小計	**323,497**
	合計	**1,150,974**
繰越金		**1,206,564**

※1　8月15日～10月中旬の予定で滞在中です。
※2　2月のブッダガヤ法要のための上人の旅行費用を分担しました。

今回の一時帰国で、会費を除いた支援金総額は 1,592,000 円でした。
支援金残額については、会費と合わせて１０月にインドへ送金します。

会計外支援
（上人往復航空券）宮本龍勝
（随行者）佐伯隆快　小林三旅
姫野智久　飯田寿一
（宿泊提供）
東京：真成院　関口雄太
岡山：長泉寺
総社：一心念誦堂
新見：遠山龍桜
尾道：真生会
大鹿村：手塚直人
名古屋：小池一郎
青森：青龍寺
南相馬：田中徳雲
小美玉：鳳林院
山梨：内船寺
（交流会茶菓）
関口昌子　山田尚子
（訪問地手土産）
遠山龍桜　宍戸末美
（切手）奥平心月

この他、各訪問先での食事、車の提供等、たくさんの方々のご援助ご協力をいただきました。また南天会世話人の方々には、各地講演会をはじめ交流会、対談などで、多くのご協力をいただきました。皆様のお名前を掲載できませんが、この誌面をお借りして御礼を申し上げます。ありがとうございました。
各地での講演等で多額のカンパをいただいておりますが、特に南天会へというご指定がなければ、直接佐々井上人にお渡ししております。また今回の繰越金については、今後年会費等と合わせまして、佐々井上人の諸活動費用の支援金として使用し、会報にてご報告いたします。

【２０１６年来日支援金寄附者御芳名】※敬称略

赤木宥子　市橋美緒奈　岩佐澄隆　位田樹音　漆間宣隆　岡本佳子　織田隆全　柏内敏子　小池一郎　河野太通　小林健二　佐伯暢哉　坂田光永　佐々木なおみ　宍戸末美　清水良将　白井昌子　関口英弥　関口昌子　関戸咲子　高尾恵子　武田英敬　武山博子　田中徳雲　田中則子　土居奈生子　道順雄喜　遠山睦子　富樫幸子　土岐信子　長瀬拓磨　成清一夫　新居大作　西阪眞一　一二三隆泉　福瀬くに子　冨士玄峰　藤原博元　宮淵泰存　宮本龍勝　森下正志　矢木惠子　吉田昌弘　吉村拓三　米盛輝雄　密門会有志　長泉寺　長命密寺

※以上は年会費とは別に南天会に支援金をいただいた方のお名前です。直接佐々井上人へお布施された方のお名前は掲載いたしておりません。

※振込用紙が同封されていた皆様へ

平成二十八年度分　年会費お振込のご案内

南天会は、この8月を持ちまして発足2周年を迎えました。
会員の皆様には、南天会の活動への変わらぬご理解とご支援を賜り、篤く御礼申し上げます。

当会では、遠きインドの地において獅子奮迅される佐々井秀嶺上人へ、日本の支援者様各位の温かい志を確実に届けるべく、会費制という形を取らせて頂いております。

お預かり致しました会費は、必要額の当会の運営費を除き、佐々井上人を含む当会関係者が管理するインド国内口座に送金致します。上記ご理解頂きました上、**同封の振込用紙にて**納入下さいます様お願い致します。行き違いで納付済の際はご容赦願います。

※入会をご希望の方へ

この度のご縁を機に入会をご希望の方は、振込用紙に**住所、氏名、連絡先電話番号（メールアドレス）**、通信欄に**希望する会員種類（支援、一般、学生）**を記入して、会費を送金ください。会費納入後、確認書類を封書にてお送りいたします。

※その他ご支援（特別支援）について

時期、金額を問わず、随時お受け致しております。左記口座にお振込下さい。
ご入会を希望せず、ご支援のみの方は、通信欄に「入会不要」とご記入下さい。

《会員種類と年会費》
支援会員　10,000 円以上／年
一般会員　5,000 円以上／年
学生会員　2,000 円以上／年　（大学生まで）

《お振込先》
金融機関名　ゆうちょ銀行
加入者名　南天会
口座番号　01380－0－90164
（払込専用口座）

※領収証が必要な方

振込用紙通信欄にその由ご記入ください。特にご記入がない場合は、「払込兼受領証」（払込取扱票の半券）を以て領収証に代えさせていただきます。

ナグプール滞在支援

南天会では、一定期間ナグプールに滞在して直接佐々井上人のお手伝いや健康管理ができる日本人スタッフの派遣を実施しております。昨年末より開始されましたこの支援は、皆様のお力により現在までほぼ途切れることなく継続することができております。この度の佐々井上人一時帰国が無事果たされたことを顧みましても、信頼できるスタッフのケアは佐々井上人の健康増進に資するものであると確信しております。

・**滞在支援要員募集**＝日本食の調理など健康面の補助、また日本との連絡を密にすることが主な任務となります。滞在期間は１～３ヶ月程度。南天会からは往復渡航費、保険、ビザ申請などの経費が援助されます。現地での滞在費用は自費となります。詳しくは南天会事務局までご連絡下さい。インド渡航未経験の方も活躍しています。

・**渡航費カンパ**＝上記口座へお振込み願います。

（南天会事務局）
〒 710-0004
岡山県倉敷市西坂 1582-1 一心念誦堂内
TEL/FAX 086-463-9391
佐伯隆快（090-5304-8955）
小林三旅（090-4538-2677）
メール　nantenkai@gmail.com
URL　http://www.nantenkai.org/

最新情報は
Facebook『佐々井秀嶺資料室』
をご確認ください。

南天会のご周知・ご吹聴にご協力ください

お陰様で入会者数は増えてきておりますが、支援の輪はまだまだ広げていかなければなりません。パンフレットなど必要な方は事務局までお知らせ下さい。PDF版は南天会ホームページ「南天会について」よりダウンロードできますので、各自印刷の上ご利用下さい。